大阪教会信徒セミナー　終末論①「神のご計画全体を知ろう」

聖書学院教師　小平牧生

「ピリポは口を開き、この聖書の箇所から始めて、イエスの福音を彼に伝えた。」使徒 8:35
「私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせたからです。」使徒 20:27

1．聖書の終末論

a.　聖書の「終末論」は、「破滅論」ではなく「完成論」であり「希望論」である。

1. 私たちの信仰は、救いの完成また神の国の希望へと向かっていくことが当然である。それゆえ、終末論こそ、キリスト教信仰全体を貫き、私たちクリスチャンの生き方と教会の宣教のすべてを決めるものである。
2. この世界の「破滅論」とその影響に惑わされてはならない。私たちクリスチャンは、「この世界が大変なので救い出してほしい」とか「人生が辛いので天国に行きたい」という動機で、イエスキリストの再臨を待つのではない。私たちは、愛する主にお会いすること、そして私たちの救いと人生の完成の時を待ち望むのだ。この世界のすべてを創造された神は、この世界とそして私たちを神の計画に沿って完成しようとしておられる。そこにいたるまでは、与えられた福音宣教の使命に励まなければならない。したがって「終末論」は「聖化論」「宣教論」などと深く結びついていく。

b.　個人的な終末論

1. 「終末論」は、「歴史の終わり」とともに「人生の終わり」を切り離すことなく取り扱う。その終わりとは、先に述べたように「完成」である。
2. 新生―聖化―栄化
   キリストによって義と認められ、新生し、神の子どもとされた私たちであるが、しかし、それで救いは完成かというと、そうではない。むしろ、それは救いの始まりであり、私たちはキリストの聖さに結び合わされて、聖なる者へと変えられていき、そしてついにはキリストに似た者とされる。
   「私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」2 コリント 3:18
3. つまり、私たちは、すでに「救われた者（新生）」として、約束された「完全な救い（栄化）」の時に向かって「救われつつ（聖化）」歩んでいる。
4. 死とは、魂（霊）と肉体の分離である。死ぬと私たちの魂はどのような状態になるのか。私たちの「肉体の死と復活までの間」（中間状態）について聖書は詳細に説明していない。それは、初代のクリスチャンたちの望みと関心がそこにはなく、イエスキリストの再臨とそれにともなうからだの復活の約束にあったからだ。ただし、明確に記されていないためにいろいろな考え方が生まれたことも事実。たしかなことは、私たちクリスチャンは死んだ瞬間から「神とともにある」ことであり、二度と「神から離されることはない」という事実であって、どこかをさまよっているような不安定な状態にはない。主は私たちから離れることはなく、また私たちを中間状態のままでおいておかれることはなく、死んだままにされずにからだの復活をあたえてくださる。

2．神の大きなご計画

a. 聖書は、さまざまな歴史、律法、系図、預言、歌、伝記、手紙、黙示などを含み、長い時代をかけて多くの著者によって記された非常に複雑な文書である。その複雑さのために全体のメッセージが見失うと、退屈に感じたり極端な解釈が生まれることになる。

b. 聖書は、創造から新しい創造にいたる神の壮大なご計画を伝える（啓示）書だ。①創造と④新しい創造の間に、②人間の堕罪の事実と③神の贖いの御業がある。終末論は終わりの事柄だけではない。「初め」が明確であって「終わり」が明確になる。創造者に対する信仰なしには「初め」がないために、「終わり」が不完全で不明瞭なものになる。神がこの世界の創始者であり完成者、最初であり、終わりである。

c. ①創造

神の創造されたこの世界と人のすべては「それは非常に良かった」（創世記 1:31）。私たち人間の姿を、対神、対人、そして対被造物の三つの点から明確にする。

【神との関係】人間は「神のかたち」としてつくられた。いのちが与えられた被造物の中で、人間だけが神と交わり、神を霊的に知ることができる。

【人との関係】人間は神の愛の交わりを他の人間との関係において生きる者とされた。第一義的に男女の「助け手」の関係に表されるが、すべての人間関係にあてはまる。

【被造物（自然）との関係】人間は、創造者である神からこの地の支配を委ねられた。この世界の管理者として、生産的な労働に従事しつつ、世界の資源の公平な分配と使用の責任が与えられた。創造の時に示された労働と休息のリズムに沿って行われる。

d. ②堕罪

創造者なる神に背いたことにより、全てにおいて本来あるべき姿と異るものとなった。

【神との関係】神の戒めに背く時に「あなたは必ず死ぬ」と言われたように、神との関係が断絶した。「あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました」（エペソ 2:1-2）。

【人との関係】神との関係における死は、夫婦、親子、社会、民族などすべての人間の関係に破れをもたらした。

【被造物との関係】それは被造物との関係にもおよび、被造物は虚無に服し、滅びの束縛の下に置かれた。本来は喜びをもって管理するべきものであったが、労働は苦しみを伴うものとなり、人間の罪と欲によって荒れ果てる結果となった。

e. ③贖い

しかし、愛なる神はこの世界と人間を破棄するのではなく、それを贖われた。その贖いとは、単に個人の罪を赦して回復するだけではなく、世界のすべてにおよび、新しい創造を行うというものであった。そのために、神はイスラエルを興し、イスラエルを通して救い主イエスキリストを送り、十字架の贖いを成し遂げ、復活により完全な救いを約束された。そして聖霊を送り、贖われた共同体として教会を生み出された。

【神との関係】イエスキリストの十字架と復活によって、私たちは「新しく生まれ」、神との関係が回復され、神との交わりに生きるものとなり、「すべてが新しく」なった。この救いは、私たちの霊的、肉体的、社会的なすべての領域を含んでいる。イエスキリストは「天においても地においても、すべての権威が与えられて」いる方だ。

【人との関係】それは私たちを個別に救うだけではなく、傷つき分裂した社会に、人種、民族、国家などを超えた「新しい共同体」としての教会を誕生させた。教会は、イエスキリストにあってあらゆる人間関係を回復し、互いに愛し合う交わりを生み出す使命が与えられている。

【被造物との関係】イエスキリストの十字架の血は、天と地にあるすべてのものの和解を与えた。「その十字架の血によって平和を造り、地にあるものも、天にあるものも、万物を御子によってご自分と和解させてくださったのです。」コロサイ 1:20 聖書協会共同訳

f. ④新しい創造・完成

イエスキリストの再臨は、歴史における神の贖いの御業の完全な成就の始まりである。旧新約聖書を通して約束された救いの完成は、神に敵対する勢力に対して最後の審判を与えるだけではなく、新しい天と地の実現をもって実現する。そこには完全な義と平和があり、神は永遠に私たちとともに住まわれる。

3．イエスキリストの再臨、そして新天新地の完成

a. 私たちの主であるイエスキリストは、王として再臨される。このできごとは、歴史における神の贖いのご計画の目的が、完全に成就されることの始まりである。

b. イエスキリストの再臨にともなう、特に千年王国と患難期については聖書的な立場にあってもいくつかの考え方がある。私たちキリスト兄弟団としては、伝統的な千年期前再臨説に立つ再臨信仰を多くの福音的な教団教派と同様に公的に告白している。そしてもっとも大切なことは神のご計画の最終的なゴールにある。旧新約聖書全体が示している希望は、神が新天新地を創造され、そしてそこに完全な義と平和が実現し、神がその民とともに住まわれるという事実だ。「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。先のことは思い出されず、心に上ることもない。」（イザヤ 65:17、66:22）。「しかし私たちは、神の約束にしたがって、義の宿る新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」（2 ペテロ 3:13）。

c. 「新しい天と新しい地」とは、どのようなところであり、何が実現するのか。先に述べた創造における、対神、対人そして対被造物の三つの点から、その完成の姿を学ぼう。

【神との関係】神が与えられる新しい天と新しい地において、私たち人間はあの創造の時に与えられた「神のかたち」としての本質が与えられる。その時、私たちはからだにおいて復活し、完成させられる。これを「栄化」という。この「からだ」は「天上のからだ（↔地上のからだ）」「御霊に属するからだ（↔血肉のからだ）」（1 コリント 15:35-）、「栄光に輝くからだ（↔卑しいからだ）」（ピリピ 3:21）と語られている。今のからだと連続している（その人だとわかる）と同時に、新しい性質における完成した姿である。このことは「天国とは私たちが肉体から離れて霊魂だけが永遠に住まうところ」という考え方とは異なるものであることを示す。そして、何よりもすばらしいことは、イエスキリストご自身が私たちとともに永遠に住まわれるという事実だ。

【人との関係】ヨハネが見た幻は、私たちがただ個人として新天新地に住むということだけではない。「私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとから、天から降って来るのを見た」（黙示録 21:2）とある。これは、イエスキリストによって贖われた私たちが共同体として完成するということだ。教会の完成である。創造のはじめにおいて人間はともに交わる者として造られた。堕

落によって傷んだその姿が、新しい創造において、キリストの花嫁として完成する。

【被造物との関係】新しい天と新しい地が到来する時、最後の審判が行われる。この世界を支配してきたあらゆる悪しき支配、権威、権力に対する審判が行われ、罪の結果として侵入してきた罪と死は滅ぼされる。このことは黙示録において「大淫婦バビロン」（19:1-3)、「獣と偽預言者」(19:19-21)、「竜」(20:1-3)、「悪魔」(20:7-10)、「死とよみ」(20:11-15）に対して神の審判が下り、これらが「死ぬ」と記されている。

d. 黙示録 21 章においてヨハネが見た「新しい天と新しい地」は、これまでの天と地が少し修正されたようなものではない。「以前の天も以前の地も過ぎ去り」とあるように、すべては新しい。そして「聖なる都、新しいエルサレムが…天から降って来る」。人が天に上っていくことによってではなく、神の完全な支配が確立している天がこの地に降ってくることによって新天新地が実現する。「時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められる」（エペソ 1:10）という神の「奥義」が実現する。

e. さらにヨハネは次の声を聴いた。それは「新しい天と新しい地」において、神が人とともに住む姿を表している。「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」(21:3-4)「神の幕屋」とは、神の住まいであり、神の臨在を表す。神の臨在のなかに人が住むということは、神とともにはない、すなわち死、悲しみ、叫び声、苦しみがないということ。悪と罪の支配によって地に満ちていたこれらのものは、すべて過ぎ去り、そこには神のいのちが満ち溢れる。

f. このことを印象深く示していることは、次の事実だ。「私は、この都の中に神殿を見なかった。全能の神である主と子羊が、都の神殿だからである」(21:22-23)。かつて、神殿は地にあってそこに神が隣在された、天と地を結びつけるところであった。しかし今や神が地に下り、人とともに住まれる。だからそこには天と地を結びつける神殿は必要がない。

g. 私たちは新しい天と新しい地においてどのように生きるのか。詳細には記されてはいないが、「…神のしもべたちは神に仕え、御顔を仰ぎ見る。…彼らは世々限りなく王として治める」(22:3-）とある。もっとも大切なことは、神を礼拝し、この世界を治めるということだ。私たちのゴールである新天新地は、どこか遠い世界にある空想の世界ではなく現実の世界だ。私たちは永遠の眠りに陥るのではなく、神を賛美しつつ、神が創造されるいのちと喜びに溢れる天と地がひとつとされた世界を治めるのだ。

4．私たちの生き方

a. 「これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。…しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。」ヘブル 11:13-

b. 私たちは、ゴールのはっきりしないような生き方をしてはならない。また、過ぎ去るこの地のものに執着する生き方はふさわしくない。なすべきことをなしつつ、その日を待つ。